

もくぞうぜんどうだいし ざ ぞう
木造善導大師坐像

<概要>

員 数	1 軀 ^く
法 量	像高 ^{ぞうこう} 83.9cm
時 代	鎌倉時代

愛知県岡崎市岩津町^{いわづ}に所在する浄土宗西山深草派^{せいざんふかくさ えんぶくじ}の圓福寺^{えんふくじ}本堂の本尊・阿弥陀三尊像の後方左右の脇壇^{ほうねんしょうにん}に、法然上人^{ほうねんしょうにん}坐像と対で安置される善導大師坐像である。本像はもと西山派深草義の祖・円空立信^{えんくうりつしん}（1211～84 年）が 1251（建長 3）年に京都深草に建立した真宗院^{しんじゆいん}（のち寺号を「圓福寺」とする）に伝来した像で、1883（明治 16）年、深草派信徒寺院の多い三河地方の妙心寺^{みょうしんじ}と寺地・寺号交換^{じち じごう}がなされ、本尊とともに京都から移して現在地に祀ったものである。

善導^{ぜんどう}（613～681 年）は、中国唐代初期に活躍した僧侶。中国浄土教の大成者として知られ、浄土五祖^(※1)の一人である。圓福寺に伝わる本像は、寄木造りの技法で製作された高僧像で、手に如意^(※2)（後補）を執って趺坐^{ふざ}する。現存する善導大師の作例はいずれも鎌倉時代以降のもので、図像としては立像と坐像の両様がある。前者は開口・合掌形で、後者は開口・合掌形、または閉口・持物形にあらわされる。圓福寺像は後者（坐像）のうち閉口・持物形の像である。同様の作例としては、京都・二尊院^{にそんいん}の浄土五祖像（絵画、南宋時代・13 世紀）のうちの善導像（拈子を執る）などがあり、いずれも両手を膝上で伏せ、左手は全指を伸ばし、右手は全指を曲げて持物を握る形であることから、本像も本来は拈子を執る姿であったと思われる。

最古の善導大師像は奈良・来迎寺像^{らいこうじ}（鎌倉時代、1200 年頃）で、開口・合掌形の坐像である。善導大師像の多くが小柄で優しい顔貌であるのとは対照的に、来迎寺像は頬骨の張る顔で、肩幅もあり、がっしりとした体形などに特徴がみられる。圓福寺像も来迎寺像同様に、骨太でたくましい体形であり、根幹部を左右二材^は矧^ぎぎ^(※3)とする構造にも共通点がみられる。

このように、本像は奈良・来迎寺像に迫る 13 世紀初期頃の作とみられ、圓福寺が創建された建長年間より遡る像で、善導大師像としては最初期のものと位置付けられる。浄土宗の肖像彫刻を考える上で重要な作例であり、愛知県指定文化財として指定する。

(※1) 浄土五祖 中国浄土教を体系化したとされる、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康の五人。

(※2) 如意 孫の手^{すのて}の形をし、先端をわらび形に巻き曲げた法具。

(※3) 二材矧 2 つの材を貼り合わせて、1 つの形とする技法。



木造善導大師坐像
(高橋寛撮影)